

# *A Midsummer-Night's Dream*の言語の研究

## A Study on the Language of *A Midsummer-Night's Dream*

西田 義和

NISHIDA, Yoshikazu

シェイクスピアの言語は古風で、レトリックがしっかりしていて、イメージ、言葉遊び、英知のこもった格言に満ちて、理解するには骨が折れることである。しかし我々がこれらを学ぶことに努力することは素晴らしいことである。我々が彼の英語に言語学的に迫ろうとするなら、関連する辞書、言語史の専門文献が必要だし、韻律やレトリックの問題では韻文や文体論の専門文献が必要になる。

シェイクスピアの言語の時期（1600年頃）というのは、初期近代英語（15世紀後半から1700年頃にかけて）のほぼ中間に位置する。初期近代英語は中英語と近代英語の橋渡しをし、現代英語発展への路線をさだめる役目をしている。この時期の英語はいまだ確固たる標準語への模索を続けているところであり、異形態の豊富なところから自由裁量の余地が十分にある。これは現代の作家にとって言語の表現手段の選択の上からいっても文体の表現手段の選択の上からいっても、今日とは比較にならないほどの自由を与えてくれているのである。

シェイクスピアが新しい表現の手段と効果を求めて、学び、応用した言語の多くの技巧

が、今なお現代英語の中に生きているのを知ることが興味深いことである。

『真夏の夜の夢』（*A Midsummer-Night's Dream*）に的を絞って、そこに出ている様々な言語の使用法を考えてみたい。

### 1. 誓いの言語 (Oath)

強意的表現として用いられる用法である。この用法はチョーサーの頃から現代英語に到るまで大きな役割を果たしてきた。この用法をまことに巧みに活用したのがシェイクスピアである。

- (1) I swear to thee, by Cupid's strongest  
bow,  
By his best arrow with the golden head,  
By the simplicity of Venus' doves,  
By that which knitteth souls and prospers  
loves,  
And by that fire which burn'd the Carthage  
queen,  
When the false Troyan under sail was seen,  
By all the vows that ever men have broke,  
In number more than ever woman spoke,  
In that same place thou hast appointed me,

キーワード：修辞法、言語、文体  
Key words : rhetoric, language, style

To-morrow truly will I meet with thee.  
(1.1.169-178)

（私はあなたに誓います。キューピッドの一番強い弓にかけて、黄金の鍬（やじり）のついた一番よいその矢にかけて、ヴィーナスの無邪気な鳩にかけて、心と心を結びつけ、恋を成功さす力にかけて、無情なトロイ人の船出を見たとき、カーセイチの女王が身を焼いたその火にかけて、女が誓ったよりもはるかにたくさんに男が破ったすべての誓言にかけて、あなたがおきめなさいましたちょうどその場所で、明日私はきっとあなたにお会いしましょう。）

(2) Marry, our play is, 'The most Lamentable Comedy, and most Cruel Death of Pyramus and Thisby.' (1.2. 11-12)

（実はこの狂言は、「いとも哀れにおかしきピラマスとシズビーの悲恋の死」というんだ。）

(3) God speed fair Helena! Whither away?  
(1.1. 180)

（美しいヘリナ神が祝福してくれるように！どこに行くの？）

(4) Masters, you ought to consider with yourselves: to bring in – God shield us! – a lion among ladies, is a most dreadful thing;  
(3.1. 30-32)

（諸君、それは諸君が自分で考えなければいかん、ご婦人方の中へライオンを持ち込むなんて

とんでもない！ 実に恐ろしいことだ。）

(5) Bless thee, Bottom! bless thee! Thou art translated. (3.1. 121)

（ああかわいそうに、ポットム！かわいそうに！お前も変わった姿になったよ。）

上記(1)では引用された最初の行より8行まで、Oathの技巧を劇的に非常にうまく活用している。“by”は「...にかけて、...に誓って」の意味で、数行にわたって見られる。“simplicity”は「無邪気さ」(simplicity)と、「人を欺かぬ」(freedom from deceit)の二つの意味が読みとられる。鳩は愛と忠実のシンボルでVenusの車を引くのである。“have broke”はhave brokenのことで、次の行にかけて「男が破った誓い(の数)は女が誓った数にまさる」と言っているのである。(2)の“Marry”はIndeed「実は」の意味で、by the Virgin Maryからでた表現である。この場合結婚とは無関係である。“Lamentable Comedy”この言葉自体が、職人たちの知識のでたらめさを示している。(3)の“God speed”はMay God blessの意味で、祈願文であるので、(-e)sをつけない。なお、“Whither away?”=Where are you going to?である。(4)の“God shield us!”はMay God protect us!「とんでもない」の意味である。“bring in...a lion among the ladies”が<sup>6</sup>is”の主語である。

(5)では前後が示されると“Bless thee, Bottom! bless thee!”というOath(誓いの言葉)を非常にうまく活用していることがよくわかる。なお“Bless thee!”=May God bless you!，“Thou art translated”=You are transformed.である。

このようにOathは強意的表現に用いられるのが一般的であるが、これが単に文の意味

を強めるだけでなく、文の内容にもまた作者の表現の特徴にも深い関係を持ちながら、大きな役割を果たしていることを認める必要がある。

## 2. 撞着語法 (Oxymoron)

互いに正反対または相いれない意味をもつ二つの語句の結合・対照で、一見矛盾した観念を与えるが、しかも真理を含む表現のことである。本来は警告的なものに用いられた。別名矛盾語法とも言う。

(1) ... ..I never heard

So musical a discord, such sweet thunder.  
(4.1. 121-122)

(今までに私はあのように美しい騒音、あのような気持ちのよい雷鳴を聞いたことはありません。)

(2) 'A tedious brief scene of young Pyramus

And his love Thisbe; very tragical mirth.'  
Merry and tragical! tedious and brief!

That is, hot ice and wondrous strange snow.  
How shall we find the concord of this discord? (5.1. 56-60)

(「青年ピラマスとその恋人シズビーとの長たらしくて簡単な一幕。いとも悲惨なる喜劇。」

喜劇で悲惨だ！長たらしくて簡単！

つまりそれは、あつい氷だ、不思議な色の雪だ。

そんな矛盾したものが、どうして調和できるだろう?)

上 記1)では“ So musical a discord ”と“ such sweet thunder ”に撞着語法が用いられている。(2)では最初の行の“ A tedious brief

scene ”「長たらしくて簡単な一幕」から最後の行の“ concord ”「不調和」と“ discord ”「不調和」まで撞着語法の羅列である。

特に(2)のように連続した著しい例は決して珍しいことではなく、シェイクスピアは他の作品でもよく用いてその箇所を非常によく盛り上げている。

## 3. 対句法 (Parallelism)

(1) Have you conspired, have you with these contrived,

To bait me with this foul derision? (3.2. 196-197)

(あなたたちはこの人たちとぐるになって、うまく企んで、こんなけしからん侮辱で、私を苦しめようというのかね?)

(2) What though I be not so in grace as you,

So hung upon with love, so fortunate,  
But miserable most, to love unloved? (3.2. 232-234)

(私がああなたのようにちやほやされず、あなたのようにすがりつかれもせず、また運がよくなって

恋をされずに片思いをする、最も不幸な身の上でも、

かまわないじゃないか?)

(3) Ay, by my life;

And never did desire to see thee more.

Therefore be out of hope, of question, of doubt; (3.2. 277-279)

(そうさ、私の命にかけて、それにもう二度とお前に会いたくなかったのさ。

だから私について望みを棄て、調べるのをやめ、

また、疑いも抱くのもやめなさい。）

上 訳(1)では“Have you conspired, have you ...contrived,”が対句法である。なお“bait”は「苦しめる、いじめる」の意味である。また“derision”はこの場合4音節で発音する。(2)はここに示されているすべての行にわたって対句法が用いられていると思われる。この箇所少し注釈を施してみることにする。“What though I be not...But (be) ~は「私が...でなくて~だってかまわないじゃないか」の意味である。“in grace”=in favourは「ちやほやされる」の意味である。“hung upon”=clung toは「すがりつかれて」の意味である。“miserable most, (be) to love unloved”は「恋をされずに片思いをする、最も不幸な身の上」の意味である。(3)では“of hope, of question, of doubt”が対句法である。

#### 4. 迂言法 (Periphrasis)

人物や事物を、複合語や語群で婉曲に表現する技巧のことである。

シェイクスピアはこの表現を彼の数多くの作品のなかに非常に多く用いている。この作品にも多く用いてその効果をあげている。

- (1) To live a barren sister all your life,  
Chanting faint hymns to the cold fruitless  
moon. (1.1. 72-73)  
(冷たい産まずの月の女神に、弱々しい讚  
美の歌を唱えながら、  
一生を独身の修道女としての生活を送れる  
かどうかと。)
- (2) But earthlier happy is the rose distill'd,  
Than that which withering on the virgin  
thorn

Grows, lives and dies in single blessedness.  
(1.1. 76-78)

(しかし人に摘まれずに空しく枝の上に  
あだ花の清い一生を送って枯れてゆくより  
も、  
香料にされるバラのほうが、この世の幸福  
は多いわけだ。)

- (3) we must starve our sight  
From lovers' food till morrow deep  
midnight. (1.1. 222-223)

(私たちは明日の真夜中すぎるまで、  
互いの顔が見られないこの眼の餓えを、我  
慢しなければならぬんです。)

- (4) a certain aim he took  
At a fair vestal throned by the west,  
And loosed his love-shaft smartly from his  
bow, (2.1. 157-159)

(彼は西の方の王座にお坐りの美しき処女  
を目がけて、しかと  
狙いを定め、その弓から恋の矢を発止とば  
かり切って放した、)

- (5) And touching now the point of human  
skill,  
Reason becomes the marshal to my will  
And leads me to your eyes, where I o'erlook  
Love's stories written in love's richest book.  
(2.2. 119-122)

(ところで今や分別心が十分出来てみると、  
理性が私の意志を指導し、あなたの眼へ私  
を連れてきます、  
そしてそこに恋の最も豊かな書物に書かれ  
た恋の言葉を読むのです。)

- (6) Lysander's love, that would not let him  
bide,  
Fair Helena, who more engilds the night  
Than all yon fiery oes and eyes of light.

(3.2. 186-188)

(ライサンダーを引張ってゆく恋は、  
あのおすこに輝くかざかざの星よりも、  
もっと燦然と夜を照らす美しいヘリナ。)

(7) Helen, I love thee; by my life, I do:

I swear by that which I will lose for thee,  
To prove him false that says I love thee not.  
(3.2. 252-253)

(ヘレン、私は君を愛する、命にかけて愛する。

私が君を愛していないなどという奴を思い  
知らせるために  
君のためなら棄ててもよいと思う、この命  
にかけて誓うよ。)

上記の(1)では“fruitless moon”=Diana, the goddess of chastityである。つまりローマ神話の女神のことで、彼女は処女性の守護神であった。これが迂言法である。(2)では“rose distill'd”「香料にされるバラ」とは、結婚した女性、既婚婦人で、この文の主語である。つまり、現世的に眺めるなら、独身女性よりも結婚した婦人(男性に摘まれて香料をしぼり取られたバラ)のほうが幸福であるということである。(3)の“starve our sight From lovers' food”とは会わないでいることである。“morrow deep midnight”は迂言法ではないが、翌朝の午前1時頃より2時頃までの時刻をさす。(4)の“a fair vestal throned by the west”「西の方の王座にお坐りの美しき処女」とはElizabeth I.をさす。ここで、西の方とはギリシャから見てのことである。(5)の“love's richest book”とは the eyes of the woman whom I love.のことである。また“o'erlook”=read, peruseである。(6)の“all yon fiery oes and eyes of light”とはstars(星)

の意味である。つまり“oes”(単数は“o”)はround objects(円形のもの)の意味で、“eyes”(i's)とのしゃれをきかせたものである。(7)の“by that which I will lose for thee”とは、つまり上の“by my life”「私の命」のことである。

この技巧の例文はまだ多く存在するが、紙面の都合でこれだけにとどめて置く。これまでに紹介してきたようにこの用法は表現しようとするものの属性や、特徴などが述べられる場合が多い。このことは直接的な語法や詩的な高さや、優雅さ、威厳を与えることを意図するからであろうと思われる。

## 5. 擬人法(Personification)

これは抽象概念または無生物に人間の如き性質を与えて表現する技巧のことである。

(1) But that, forsooth, the bouncing Amazon,  
Your buskin'd mistress and your warrior  
love,

To Theseus must be wedded, and you come  
To give their bed joy and prosperity. (2.1.  
70-73)

(それというのもつまりお前さんの惚れている、

バスキン靴を穿いて戦争をするあのいばり  
屋のアマゾン女王が

シーシュウスと結婚することになって、お  
前さんは

その新床の喜びと栄えを祈りに来たのじゃ  
ないかね。)

(2) Full often hath she gossip'd by my side  
And sat with me on Neptune's yellow  
sands, (2.1. 125-126)

(いく度もいく度も私の側でうちとけたむ

だ話などをし、  
海の神の支配する黄色い海辺の砂浜の上で  
一緒に坐って、)

(3) And certain stars shot madly from their  
spheres,  
To hear the sea-maid's music. (2.1. 153-  
154)

(ある星はその人魚の音楽を聞くために、  
狂気のように天球から飛び出したことを。)

(4) Love takes the meaning in love's  
conference. (2.2. 46)

(恋人というのは、お互いの話を善意に解  
釈するものですよ。)

(5) and yet, to say the truth, rea-  
son  
and love keep little company together now-  
a-days;  
the more the pity that some honest neigh-  
bours will not make them friends. (3.1. 146-  
149)

(しかし実を言うと、今日では理性と恋愛  
は一向に両立しないんです。  
正直な人たちがこの二人(理性と恋愛)を  
仲直りさせないのは、  
ますます残念です。)

上記の(1)の“bouncing Amazon”「いばり  
屋のアマゾン女王」はつまり、ヒポリタは  
Amazon族の女王であったことになる。(2)の  
“Neptune”は古代ローマの海の神である。ギリ  
シャ神話のPoseidon(ポセイドン)に当たる。  
従って、“Neptune's yellow sands”が擬人法で  
ある。(3)の“sea-maid”=mermaidで、擬人法  
である。(4)の“Love”=Loverで、擬人法であ  
る。さらに補足すると言葉が足りないところ  
は愛情で補うということである。(5)の“rea-

son and love”が擬人法である。“the more  
the pity”=more's the pity「ますます残念で  
す」の意味である。

この技巧はこの作品でもこのように非常に  
多く用いられている。中世的な伝統を背景に  
もつ擬人法はシェイクスピア時代の作家に  
よって育てられ、それを作品の中に非常に効  
果的に活用しているのがシェイクスピアであ  
るといっても決して言い過ぎではない。

## 6. 冗語法 (Pleonasm)

必要以上の語の使用による表現で、類語反  
復 (Tautology) ともいう。特に、強調的効果  
を与えるために故意になされているものを指  
すことがある。

(1) That pure congealed white, high Taurus'  
snow,  
Fann'd with the eastern wind, turns to a  
crow  
When thou hold'st up thy hand: (3.2. 141-  
143)  
(あの東風に吹き清められて、純白に凍っ  
た  
トーラス山頂の雪も、あなたが手を挙げる  
と  
真っ黒に見える。)

(2) To vow, and swear, and superpraise my  
parts,  
When I am sure you hate me with your  
hearts. (3.2. 153-154)  
(心から私を嫌っていることは、ちゃんと  
わかっているのに、  
誓ったり、保証したり、私の美点を並べ立  
てて褒めちぎる。)

(3) Now I perceive they have conjoin'd all

three

To fashion this false sport, in spite of me.  
(3.2. 193-194)

(今こそわかった、三人で腹を合わせて、  
こんなうその芝居を仕組んで、私をいじめ  
ようというのだ。)

(4) Get you gone, you dwarf;  
You minimus, of hindering knot-grass made;  
You bead, you acorn. (3.2. 328-330)

( うせる、一寸法師め。  
みち柳のせいで大きくならなかつたちびめ、  
南京玉め、どんぐり女め。)

(5) Whose liquor hath this virtuous property,  
To take from thence all error with his might,  
And make his eyeballs roll with wonted  
sight. (3.2. 367-369)

(その液には、その力で眼からすべての迷  
いを取り去って、  
その視力を平生どおりに働かせるという効  
き目がある。)

上記の(1)の“ That...white ”は“ snow ”の  
冗語法である。“ turns to a crow ”は「(あな  
たの手の白さに比べれば)カラスのように黒  
く見える。」の意味である。(2)は“ To vow,  
and swear ”が冗語法である。“ superpraise  
my parts ”= overpraise my talentsである。(3)  
は“ they...all three ”が冗語法である。この箇  
所に注を施してみる。“ they have conjoin'd  
all three ”= all the three have joined together、  
“ fashion ”= put in shape、“ in spite of me ”=  
in order to spite me 「私をいじめるため」と  
なる。

(4)は“ hindering ”「成長を妨げる」が冗語  
法である。“ minimus ”= anything very small  
「ちび」である。“ of hindering knot-grass

made=made of hindering knot-grass (みち柳  
の振り出し汁を飲むと成長が止まるとされて  
いたので、このように冗語法が用いることによ  
って、全体に強調の効果が出ている。(5)  
は“ virtuous property ”はvirtueやefficacyと  
同義に用いられ、いわゆる冗語法である。

この作品にはまだ数例あるが、シェイクス  
ピアはこのような表現を非常に多く用いるこ  
とによって、文に快調を与えるとともに、叙  
述に変化を与える効果をあげている。

## 7. 同語源語反復 (Polyptoton)

前の語句と同じ語句または語根・思想を、  
様々な方法で反復する技巧のことである。こ  
の用法もシェイクスピアは非常に多く使用し  
ている。

(1) Either to die the death or to abjure  
For ever the society of men. (1.1. 65-66)  
(国法どおり死刑になるか、それとも  
永久に人間との交わりを棄てるかだ。)

(2) For you, fair Hermia, look you arm your-  
self  
To fit your fancies to your father's will; (1.1.  
117-118)  
(ハーミア、お前はね、自分の浮気心を  
父の意志に従わせるように覚悟をきめるが  
よい。)

(3) Where is Lysander and fair Hermia?  
The one I'll slay, the other slayeth me. (2.1.  
189-190)  
(ライサンダーと美しいハーミアはどこに  
いるのか。  
男の方は殺してやるが、女の方には殺され  
るわけだ。)

(4) We cannot fight for love, as men may do;

We should be woo'd and were not made to woo. (2.1. 241-242)

（私たちは男のように、戦って恋を得るわけにはいきませんが、恋してもらう方で、恋を仕掛けるようにはできていないのです。）

(5) With half that wish the wisher's eyes be pressed! (2.2. 65)

（その願いの半分が、願う人の眼にありますように！）

(6) Things growing are not ripe until their season:

So I, being young, till now ripe not to reason; (2.2. 117-118)

（すべて生長するものは、時機が来なくては熟しません。だから私も年が若くて、今までは理性が熟しませんでした。）

(7) I follow'd fast, but faster he did fly;

That fallen am I in dark uneven way, (3.2. 416-417)

（急いで追いかけたのだが、彼のほうがなお早くて、私は真暗なでこぼこの処へ落ち込んでしまった。）

上記(1)の“die the death”が同語源語反復である。(2)では“you...yourself...your”が同語源語反復である。“look you arm yourself”= see that you prepare yourselfである。(3)の“The one I'll slay, the other slayeth me”は対立的対句法である。この中の“...slay ...slayeth”が同語源語反復である。“The one”「前者」はLysanderを指し、“the other”「後者」はHer-miaを指している。(4)では“woo'd...woo”が同語源語反復であるが、またこの文は対照法

(Antithesis)にもとれる。(5)は

“wish...wisher's”が同語源語反復である。(6)の“...not ripe...ripe not...”では初めの“ripe”は形容詞、後の“ripe”(=ripen)は動詞であるが、同語源語反復である。(7)の“fast...faster”が同語源語反復である。またここでは“follow'd fast...faster...fly”と“f”音の頭韻(Alliteration)を使用している。文の形態美を尊重したシェイクスピアは、言葉の音響印象にも敏感で、たえず文の律動美を考慮し、意識的に音の反復を行ったことはまことに当然である。

## 8. 格言隠喩 (Proverbial Metaphor)

シェイクスピアはこの技巧もこの作品の中に非常に多く(約30例)用いているが、ここではその一部だけを引用してみる。

(1) Hippolyta, I woo'd thee with my sword,

But I will wed thee in another key,

With pomp, with triumph and with reveling.

(1.1. 16-19)

（ヒポリタ、私は剣を持ってあなたの愛を求め、

あなたの心をかちえたのも力づくであった。

だが結婚の儀式はすっかり調子を変えておこないたい、

華やかに、にぎやかに、楽しいお祭り騒ぎをもってだ。）

(2) I am your spaniel; and, Demetrius,

The more you beat me, I will fawn on you:

(2.1. 203-204)

（私はあなたのスパニエル犬です。ゆえにデミートリアス、

あなたに打たれれば打たれるほど、甘えま

(3) for indeed, who would set his wit to so foolish a bird?

Who would give a bird the lie, though he cry 'cuckoo' never so? (3.1. 137-139)

(だって、誰がそんなばかな鳥を相手に議論をしよう？

たとえ鳥がどんなに「阿呆」と鳴いても、鳥を嘘つきだと誰がいおう。)

(4) If thou hast slain Lysander in his sleep, Being o'er shoes in blood, plunge in the deep,

And kill me too. (3.2. 47-49)

(もしあなたがライサンダーさんの眠っているところを殺したのなら、血の川に一度足をひたせば深みに飛びこめと言うから(毒を食わば皿まで) いっそ私も殺してください。)

(5) About the wood go swifter than the wind, And Helena of Athens look thou find: (3.2. 94-95)

(森の中を風より早く飛びまわって、アテネのヘリナをきっと見つけろ。)

上記(1)では“woo'd thee”、“won thy love”、“wed thee”の3つが格言隠喩である。“in another key=in a different way「これまでとはすっかり調子を変えて」の意味である。(2)の2行は当時諺に見られた表現である。従って格言隠喩といえる。(3)の“who...so foolish a bird?”が格言隠喩である。“give...the lie「...の嘘を責める」(鳥が‘cuckold(妻を寝とられたと男)と鳴いてもそれが嘘などと誰が言おうか。)」ということである。(4)の“Being o'er shoes in blood”=As thou art in blood over thy shoes(靴の上まで血につかっているのだから)「毒を食わば皿まで(というから)」、

“over shoes, over boots”(水の中に靴より深く入ったのなら、長靴をこえるまで入れるがよい)という格言にかけているので、これも格言隠喩である。(5)の“swifter than the wind”は格言隠喩である。“As swift as the wind”という格言があるように、シェイクスピアがこの箇所を書くときに、意識して、または無意識であったにしろ、この古い格言が念頭にあったかも知れない。この箇所の英文を聞くなり読むなりして、すぐにこのような格言を連想することは、英語を母国語とする多少の教養のある人々には、決して困難ではないかもしれない。しかし我々外国人である日本人には、必ずしも容易なことではないので、様々な角度からこのような用法を身につけることが大切であろう。そうすることによって、例えばここには格言隠喩が使用されていると念を押して読むことで、文の味わいや面白みが倍加するような気がする。

シェイクスピアの言語や修辞学はかぎりない国語愛と、たくましい文学精神とにささえながら、変化し発展しつつシェイクスピアの文学の内容と表現形式に大きな影響を与えたのである。そして筆者はこの作品を通じてシェイクスピアの言語と修辞学への関心と興味、さらにシェイクスピアが言語、修辞学、そして論理学の技巧を如何に取り入れたかをわずかではあるが考察したものである。

### 参考資料

テキストは*A Midsummer-Night's Dream, the Arden Shakespeare Complete Works* (1988) pp. 889-912 より採った。日本語訳はほとんど研究社版の沢村寅次郎訳を使わせていただいた。

池田拓郎 『英語文体論』 研究社、1992年。

倉橋健 『シェイクスピア辞典』 東京堂出版、1985年。

大塚高信 『シェイクスピアの文法』 研究社、1985年。

東田千秋 『英文学の言語と文体』 三省堂、1957年。

山本忠雄 『シェイクスピアの言語と表現』 南雲堂、  
1967年。

石井正之助 『夏の夜の夢』（大修館シェイクスピア  
双書）大修館書店、1987年。

市河三喜、嶺卓二 『*A Midsummer-Night's Dream*』  
研究社、1963年。